

江馬氏館と江馬氏

室町期の国人領主と館

小島道裕

Muromachi Period Regional Lords and Their Manor Houses—The Case of Ena Family, Hida Province

はじめに

- ① 文献史料に見える室町期の江馬氏
- ② 江馬氏館の遺構と室町期国人館の事例
- ③ 江馬氏館とその変遷の意味

「論文要旨」

飛騨の国人領主江馬氏は、庭園を伴う館で知られている。まず文献史料で考察すると、南北朝初期から將軍に近侍し、遵行指令を受け、中央と密接な関係を持っていたが、一五世紀後半には自立した地位を持つことが知られ、一六世紀には莊園関係の史料には見えなくなる。一方遺構は、一四世紀末〜一五世紀前半に、「花の御所」を模倣した館が営まれるが、一五世紀後半には山城などに機能が分散し、一六世紀には館としての機能が廃絶する。こうした現象は他の国人領主の館にも見られることが知られてきており、国人領主が全国的な体系の中で存在していた一五世紀前半から、領域的な領主として自立する一五世紀後半以降への変化と言える。この変化の中で衰退した国人も多く、逆に一四世紀中葉〜一五世紀前半には中央と地方の国人の間の安定した関係があったと言え、これを「室町期莊園制」の一面と見なすことができる。